慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	愛の神秘 : 超現実主義劇
Sub Title	Roger Vitrac : Les Mystères de l'amour
Author	Vitrac, Roger(Eito, Takio) 永戸, 多喜雄
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2015
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.60 (2015. 3) ,p.298(69)- 366(1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	Mélanges offerts au professeur Suzuki Junji et au professeur Hayashi Emiko = 鈴木順二教授・ 林栄美子教授退職記念論文集
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20150331-0366

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

愛の神秘——超現実主義劇

ロジェ・ヴィトラック作
永戸　多喜雄　訳

シュザンヌに

わたしたちを愛する女性がまことの夜宴に新たな装いを与える。
（アルフレッド・ジャリ『絶対の愛』）

作者の覚え書

これは私の処女戯曲、シュルレアリスム劇です。

事情をよくご存知ない読者の眼には、この戯曲は、後から書かれた作品とは甚だしく違うように見えるでしょう。私は本書の冒頭にこの作品を収めることをためらいましたが、年代順にはそれなりの要求があり、思考もまた然りです。

一部の方々は、この晦渋な劇は全巻の調子にそぐわないと思われるでしょう。他の方々は、そうあって欲しいと願うのですが、この劇が本書の中で調子外れなのは、全体をよりよく説明するためでしかないことをご理解下さるでしょう。

この方々は、間違いなく、前者よりも二十二才の青年と十八才の娘に近いのです。この二人は、揃いも揃って、変愛のように盲目で、つち蛍のかわいい明かりのように聾ですが、真面目にこの神秘のために演じてくれました。

黒い糸で縫い合わされたこの神秘……

「夢見るように生きること」。

「生きるように夢見ること」。

「永遠にひっくり返せる**昼**と**夜**の砂時計」。

「大きいのに目には見えない**愛**の、怖ろしくもまた愛すべき砂時計」。

だが、閃先の襞に包まれた神秘は正体を露わにすることがありません。神秘は閉ざされた眼にはっきりと現れるのです。何もかも語らなければならないことを、私はよく承知しています。明快に？　何故？

理解されることがすべてです。
ここにあるのは、こだまの対話です。
いずれにしても、ギョーム・アポリネールは、すべて公開しなければならないと申しました。

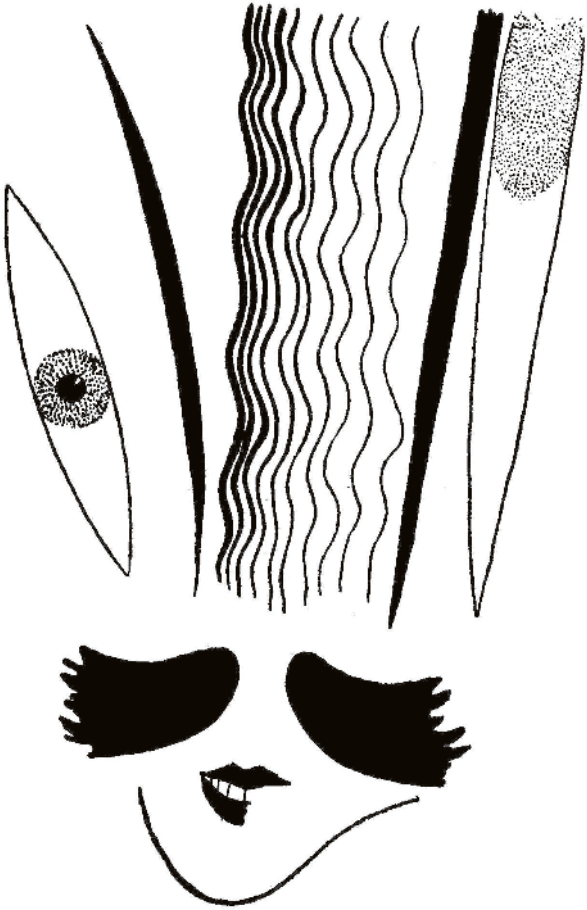
登場人物

パトリス、二十三才
レア、二十一才
モラン夫人、レアの母
パトリスの友達、その一
パトリスの友達、その二
パトリスの友達、その三
ドヴィック（リュドヴィックの略称三十才）
隣人たち
生娘
若者、役者
老人、役者
劇場支配人
テオフィール・ムウシェ、劇作家

龍騎兵中尉（パトリスが受け持つ役）
ロイド・ジョージ（ドヴィックが受け持つ役）
赤と黄の布製の子供（無言の人物）
肩の高さで切断された少女（無言の人物）
黒衣の女（モラン夫人が受け持つ役）
角苅りで碁盤縞のズボンを穿いた男、モラン氏
屠殺人夫
作者
ギョタン[1]（パトリスとレアの息子、無言の人物）
白いフォックス・テリア
灰色のブルドッグ
ムッソリーニ（パトリスが受け持つ役）
車掌
家政婦
二人の料理人（無言の人物）
燕尾服の男
小間物屋の女主人
数名の亡霊（無言の人物）
ホテルの上宿人たち

二名の警官
ホテルの管理人
三人の子供
観客（無言の人物）

「愛の神秘」はアルフレッド・ジャリ劇場により一九二七年六月二日グルネル座の舞台で初演された。演出はアントナン・アルトー。



プロローグ

舞台は広場をあらわしている。曇天。雨あがり。とある建物の壁に対頁の似顔絵が描かれている。口は黒塗り。頬は唇のような赤。眼は蒼白い。

幕が上がると、うずくまったパトリスが、棒切れで地面にくねくねした線を何本も引いている。警官が一名登場する。

警官　おい、きみ、何をしているんだ？

パトリス　ご覧の通り、彼女の髪の毛をかきおえたところで。

蛇行する線を引きながら退場。

ゆっくりと幕がおりる。

プロローグ、おわり。

第一幕

第一場

前桟敷のボックス席。奥には舞台。幕がおりている。フットライトは消えているが、客席のシャンデリアは点灯されている。左右に黒の壁紙。ボックス席を縁取って、花づな飾りの白いレース。

幕が上がると、レアは腰を掛け、パトリスはその膝元に。

パトリス　後生だから、白状しておくれよ、レア。

レア　あなたのいう通りよ。

パトリス　そうなんだろう、レア？　さあ、ここにいるきみは、物分りのいい娘だ。だからさ、白状しておくれよ。ぼくを信用するんだ。遅かれ早かれ、一度はしなければならないだろう。子供みたいに強情を張るものじゃない。きみはぼくの怒っている顔をまともに見られないんだろう？

レア　パトリス！　何をしているの？

パトリス　（相変わらず膝をついたまま）何も、レア、何もしていないよ。見てのとおり、ぶらついているんだ。さあ、白状してくれるね？

レア　いやよ。

パトリス　最後のお願いだ、レア！

レア　だめ。
パトリス　この花を受取るがいい。

平手打ちを加える。

レア　（笑って）ママ、ママ、ママ！
パトリス　（メガフォンのように手を口に当てて）モランの奥さん、モランの奥さん！

モラン夫人登場。

モラン夫人　お二人さん、お邪魔してごめんなさい。
レア　あら、ママ！
パトリス　ぼくの方が余計なんですよ！
モラン夫人　何ですって！　この色情狂！　すぐわたしに出て行けっていえばいいでしょう。（レアに）こいつはうぶだよ。
パトリス　（彼女に椅子をすすめながら）ぼくの方は、池を一とまわりして来ますよ。

着席して客席を眺める。

レア　（小声で）ママ、分かってる、パトリスはわたしに惚れているのよ。
パトリス　（大声で）おっと危ない！　落っこちますよ。
モラン夫人　それは、お前、でかしたね。
パトリス　（同じく大声で）あなたですか、牛は？
モラン夫人　で、お前、あの人が好きなのかい？
レア　あたりまえよ。
パトリス　（また大声で）娘さん！　ザリガニ親爺をどやしてやりなさい。
モラン夫人　ねえお前、この子だって大人になるよ。こちらはね、犬の面倒で手がまわらないよ。仔犬が六匹もいるんだからね。レア。
レア　そんな話、頭にきちゃうわ。わたしがはじめて御聖体を拝領するのを、モラン爺さんが望まなかったからって、わたしのせいなの。口惜しいったらありゃしない！
モラン夫人　とにかくお前が決心しなくては。
レア　出来っこないわ。
パトリス　ほ、ほう。今度は山羊だぞ。
モラン夫人　お前の代りに話してあげようか？
レア　それほど馬鹿じゃないわ。わたしから取り上げたいんでしょう。
モラン夫人　何だって。

レアに平手打ちを加えて退場。

レア　（泣きながら）パトリス！　パトリス！　パトリス！
パトリス　動物も食堂も糞くらえ。
レア　あなたって世の中で独りぼっちなのね、パトリス。
パトリス　おや、きみか！　ぼくの家族にも敬意を表してもらいたいもんだな。
レア　あなたがいうことはよくわかるわ。だから何でも話しちゃう。
パトリス　ほ、ほう…
レア　あなたが質問する番よ。
パトリス　それにしても、モランの奥さん、あなたのおへそはずいぶんと大きいですね。
レア　それだけなの？　ひどいわね！
パトリス　とんでもない！　あの女(ひと)は強いよ。何がいいたいの、レア？
レア　白状するわ。
パトリス　ああ、どうもありがとう。どうも、どうもありがとう、レア。

パトリスの三人の友達登場。

友達一　嬉しいね、きみ。

握手をする

パトリス　ありがとう。
友達二　残念だなあ。あのひとはぼく向きに作られたんだ。木でね、パトリス。
パトリス　どうもありがとう。

握手する。

友達三　ああ、子供の中の子供。ぼくに一人残しておいてくれよ。
パトリス　ありがとう。で、きみは？

三人の友達退場。

パトリス　ぼくはネクタイを締める。環になって鋸みたいな歯があるネクタイを。きみのためにぼくの血で橋を架けてあげるよ、レア
レア　あなた優しいわね。
パトリス　いいかね。ぼくは一瞬仔羊になる決心をした。仔羊は啼いていた。メエー、メエー、メエー……草が列車から降りようとしていた。草は気取っていたが仔羊は草におしっこをひっかけた。若いってこういうことさ。

沈黙。

パトリス　やあ、これは失敬！　きみは白状したね。しなかったかな？
レア　したわよ。で、どうしたの？
パトリス　本当かね？
レア　ちょっと待ってくれない？

退場するがじきに仔犬が一杯に詰っている篭を持って戻ってくる。

レア　母がこのくり篭をあなたにお犬しますって(?)。
パトリス　ありがとう。

犬と篭を客席に投げる。

だってぼくは、きみも知ってのとおり、宗教なんて……

沈黙。

パトリス　（盛んに身振りをまじえて）何てすばらしい太陽だ！　何てすばらしい太陽だ！　本当なんだね、レア？　いますぐに死にたいぐらいだ！　やあ、諸君。

三人の友達登場。

パトリス　（あいかわらず身振りたっぷりで）おそろいでお出かけになるところですな？

三人の友達退場。

パトリス　ねえ、レア。ぼくは嬉しいんだ。これで充分。息が詰まりそう。牡蛎がやって来た。わかるかい。（大声で）牡蛎がやって来たんだ。でも、レモンの奴何をしているのだろう？　おお、レア、その脚を、膝をかくしておくれ。その太腿をかくしておくれ。（喚く）おお、おお、おお、おお！　ぼくは叫ぶぞ。屋根の彼方に、星の彼方に、何千何万という星の彼方に向かって！（客席を証人として）レアがぼくを愛している。レアがぼくを愛している。レアがぼくを愛しているんだ。彼女はそう白状したんだ。彼女はぼくを愛しているって。（レアに）今度はきみの番だ。レア、大声で同じことを云うんだ。さあ、ぼくの可愛いレア、ぼくのレア、ぼくのレアレア。大声でいうんだ、さあ、いうんだってば、ぼくのレア、レア、レア。

レア　（客席に向かって）わたしはパトリスを愛しています。ああ、わたしはこの人の内臓まで好きなのよ。ああ、この道化師が好き。ああ、この道化師が好きなの。あらゆる面で、毛穴の一つまで、なにもかも好き。あの人たちをごらんなさい。パトリス。あの人たちが何ていうか聴いて。あっ、はっ、は……

爆笑する。

一つの声　（客席で）だが、どうして？　何てこった！　どうしてなんだ？　身体でも悪いのか？
レア　夢中なのよ。
同じ声　きみたちは頭がおかしくなったのか？
パトリス　夢中なのさ。
一つの声　（客席で）二人の話をきいたかい、マルチーヌ？（銃声）
別の声　きいたかね、マリー？（銃声）
別の声　きいたか、ジュリー？（銃声）
別の声　あの二人が何いったかきいたかい、テレーズ？（銃声）
別の声　きいたか、ミシェール？（銃声）
別の声　きこえたかい、エステール？（銃声）
何人かの声　おれを殺せ。やつを殺せ。あの女を殺ってしまえ。後生だ！　許して！　坊や！

喧騒、悲鳴、銃声。突然シャンデリアが消える。忽ち鎮まりかえる。ただボックス席だけが、薄明りに照らされている。

パトリス　お聴き。山の上を散歩しているところだ。樅の林がこごえている。ああ、青春よ！　氷河の下のシャンデリア。それに沼地だ。沼地かな？　子供のない女たちと同じ数の寝台。そして突然灰鷹が現れる。奴だ。ぼくがいった通りだ、奴は死んでる。奴は稲妻みたいに落ちる。地面に落ちると、身体の両脇には何もない。もう翼がなくなっている。眼は二つある。レアじゃないかな

レア　レアじゃないわよ。

パトリス　でもそうなんだ。身体のほかの部分はどうかといわれるのですか？　ああ、ごらんなさい。彼女は血塗れの翼ではばたいています。ご婦人方、彼女のようにしてごらんなさい。喪服の毛皮を脱いで、肌をむきだすんです。肌は、くっついていなけりゃいけません。きみは、脱いじゃいけないよ、レア。ここで脱ぐんじゃない。筋肉が冷えて神経がすり減ってしまうだろう。ああ、これはぼくが不意打ちを食わされないためさ。ぼくがね。皆さん、ご安心下さい。ぼくの寝台はここのように火薬の臭いなんかしませんよ。

レア　まあ！　いまから脳味噌の臭いがしていることよ。

パトリス　ありがたいご忠告で。麩（ふすま）を撒いて肱掛椅子の下を掃除しなさい。この泥はひどい臭いだ。

レア　止してよ。パトリス

パトリス　いやはや、何てこった。整頓だ。少しばかり片付けるんだ。どうか女たちを右側にねかせて下さい。男たちは左側に立たせて。子供たちは、真ん中のソースの中に。

レア　その通りよ、きみ。

パトリス　お黙り！　さて、知事閣下、わたくしのためにこのすてきな連中を鎖で繋いで下さい。

声　（客席で）パトリスさん、あなたは罪人だ。

パトリス　わたくしが？　いいえ、そうではありません。あなたは耳がきこえないのですか？　ぼくはレアを愛しています。おれはジュリーを、マリーを、テレーズを、ミシェールを、エステルを愛していると大声でおっしゃるべきでした。そうすればレアはそのたくさんの女性の中の一人になるでしょう。そしてぼくは両手で淫乱をものにするでしょう。

レア　そしてわたしは、今夜は燐と一緒に眠らなくても済むでしょう。

パトリス　小鳥の小さな脳味噌と一緒にだよ。ほんとに。
レア　やめて、パトリス。
パトリス　ごく自然に　ねえ、きみ。今夜は大勢のひとが来るだろう。
レア　よかったわ。よかったわ。
パトリス　みんながぼくたちに合図している

レアとパトリスは、客席に向かって親しげな合図を送る。客席が明るくなる。

レア　で、顔は？
パトリス　えっ！　きみはぼくにナイフの一突きを、傷口を想い出させるよ。
レア　あのおしっこをする動物、あなたが夢中になっているような。
パトリス　誓っていうが、そうじゃない、レア。あれは額のまん真ん中だった。それに、こんなこと全くどうでも良いんだ。
レア　顔は、パトリス。
パトリス　ああ、人魚たちよ！　きみたちはみんな魚の頭をしている。
レア　ばかなこといわないで。無理にきかせようとするなら、すぐにでも素っ裸になるわよ。
パトリス　全く無駄だ。ぼくが興味があるのは着る物だけなんだ。その辺をふらつくドレス、燕尾服、下着。チョークや蠟や、木や、骨や肉で作った構造物は、みんな火葬場行きです。歩道の二メートル上を滑るように飛んで行く帽子を見たことがありますか？

レア　嫌らしいわね。助けて！
パトリス　レア！　レア！
レア　どうしたの？
パトリス　心配はいらない。ギプスが痛いんだ。
レア　あなたのギプスが？
パトリス　ぼくのがらん洞がいたいのさ。
レア　それで？
パトリス　ああ。きみはあとでポンプに吸ってもらうといいよ。
レア　パトリス、それは何故？
パトリス　きみ、それは赤い色をしたものを吸い取るためだ。
レア　豚の膀胱と提燈[3]みたいなものね、あなた？
パトリス　ほうれ、ひげおばさんのご到来だ。先端の英知の。

沈黙。

ドヴィック登場。パトリスはぼんやりした眼付でレアを見る。彼はこれから先の場面に全く関心を示さない。

ドヴィック　（レアに）やめろ、やめろったらやめろ。
レア　で、なぜこんなことになったのかしら？
ドヴィック　まったくきみは嘘つきでやきもちやきだな。

レア　それに全身が震えて汗まみれ、その上涙でぐしょぐしょ。
ドヴィック　結局何が望みだったんだ？　動物か、機械（からくり）か、子供か？
レア　その人にわたしのお腹を切開いてもらうこと。
ドヴィック　石頭め。
レア　あの髯で。
ドヴィック　ああ、よせってば。ここで破廉恥なことをいうもんじゃない、わかったか？　おれは反対だぞ、レア（彼女に平手打を加える）おれはずっときみが好きだった。（つねる）いまだって好きだ。（噛みつく）おれの名誉をとりもどさなければならない。（彼女の耳を引っ張る）おれはびくびくしていたか？（顔に唾を吐きかける）きみのおっぱいや頬っぺたを可愛いがってやったんだぞ。（足でける）きみだけが問題だったんだ。（首を絞めるまねをする）きみは行ってしまった。（激しく彼女をゆさぶる）おれがきみを恨んだか？（拳固で殴る）おれは優しいんだ。（彼女を床に投げ出す）。疾うに赦してやったんだ。

彼女の髪の毛をつかんでボックス席のまわりを引き摺りまわす。
パトリスが起き上がる。

レア　（パトリスにドヴィックを紹介して）ねえ、パトリス、ドヴィックさんは紳士よ。
パトリス　そのドヴィックっていうのは何者だ？
ドヴィック　私です。
レア　（小声でパトリスに）この人、頭のうしろがしびれているの。

パトリス　結構。で、ドヴィックさん、人生であなたが興味をお持ちなのは？

ドヴィック　愛です。愛ですよ。本当に。

パトリス　他人の家に乗り込むとは、変ったお考えで。こんなことをいいますのも、あなたが、確かにぼくらと一緒に夕食をする積りだからです。

レア　この人を招んだかしら？

ドヴィック　階段の上り降りには慣れているし、鍵はいつでもドアの上にある。

パトリス　よろしい。（レアに）窓を閉めて、テーブルの支度をするんだ（ドヴィックに）それで、どんな形の愛にご興味を？

ドヴィック　（レアを指して）わかっているくせに。

それ以上一と言もいわずにドヴィックとパトリスは取っ組み合いをはじめる。二人は床に転がって容赦なく猛烈に殴り合う。

レア　（眼で殴り合いを追いながら）石像に気をつけて。右に寄ってちょうだい。さもないと肱掛椅子を引っくりかえすわ。今度は左に寄って。火の中に倒れるわよ。パトリス植木に気をつけてよ。ドヴィック、鼻血が出てるわよ。テーブルクロスを汚しちゃうわ。お皿が粉々よ。ああ、どうしましょう。しっかりしてよ、二人とも。

ドアをノックする音。

パトリス、ドヴィック、すぐ止めて。誰か来たわ。立ちなさい、パトリス。ドヴィック、立ってよ。

数名の隣人たち登場。パトリスとドヴィックが起き上がる。ドヴィックは血塗れ。

パトリス　（ドヴィックに）出て行きたまえ。（隣人たちに）あなたがたも。

ドヴィック　（ボックス席の一点を指して）あの棕梠の木はおれのだ。

ドヴィックが退場、隣人たちは肩を掠める。

レア　偏頭痛がするわ。

パトリス　それにしても、何という太陽だ！

レア　ちょっと。あなた、わたしには全く何も期待しないの？

パトリス　しないね。

沈黙。

長い寝間着をまとった女登場。顔、両手、両足のすべてが青い色。

パトリス　今晩は。

レア　わたしたちの部屋に？　パトリス、そこで何しているの？

パトリス　なぜいけないんだ？
レア　その淫売は何者よ？
パトリス　乙女だ。乙女だよ、レア。満足かね？

寝間着姿の女退場。
開幕の合図。シャンデリアが消える。
脚光に点灯。ボックス席が暗がりの中に没する。数秒間、幕が異様に揺れる。揺れる度に観客たちが実に多様な叫び声を発する。やっと、ゆっくりと幕が開く。
舞台には何もない。奥のキャンバスに次の文字が見られる。

人はいつでも
死ねる
一度に二時間
巻煙草・絹

左手から燕尾服を着た若者が、右手からは地面に鬚を引摺る老人が登場。若者はステッキと帽子と手袋を手放し、地面に置く。老人は天に向かって手を差し延べ、微笑む。

若者　（ポケットから一羽の鳥をとり出して）パパ、パパの眼の前に死にかかっている鳥がいるんだよ。

老人　それではこの鬚をシーツの上に拡げてくれ。乾かしてやらなくては。

若者　それじゃ鬚を洗ってないんだね？　何て穢ないんだ。

老人　ああ！　わしが餓鬼のころにはな、ジェスタン、この鬚は雪のように白かったものだ。

若者が手を開く。鳥が飛び去る。二人とも泣きながら左手に去る。

不意に幕がおりる。一発の銃声がきこえる。客席から二、三の抗議の声があがる。すぐに劇場支配人が現れる。

支配人　皆さま、上演は終わりました。御高覧いただきました芝居は、テオフィール・ムーシェ氏の作品でございます。テオフィール・ムーシェ氏はたったいま自殺されました。

支配人が姿を消す。放心状態、次いで笑声が段々高くなる。

一つの声　作者だ！　作者だ！

客席全体　（声を揃えて）作者よ！　作者だ！　作者だよ！

再び幕が上がる。作者が現れる。シャツの袖をまくり上げている。顔と服は血だらけ。彼は笑う。大声で笑う。

両脇に手を当てて、力一杯笑う。

二枚の幕がいきなりおりる。

第二場

舞台の左手はパリ市のグランゾーギュスタン河岸をあらわす。右手には寝室。中央にはセーヌ河に面して丸窓が一つある小さな哨所が立っている。奥の、実際は高等法院が占めるべき場所に、大きな青い文字で le Petit Parisien（ル・プチ・パリジアン）と記した広告板がある。胸墻の上には棺の形を象とった古本屋の展示函。その上に曳き船の赤い煙突。部屋の狭く閉ざされた窓は拱架にかくれて見えない。窓には抜けるように白いモスリンのカーテンがついている。暖炉の前の焚き口から二メートルのところにサラマンドル型のストーヴが置いてあるが、ときどき暖炉から青い火が出てくる。寝台はシーツにすっぽりおおわれている。テーブル。椅子（複数）。テーブル上には緑色のシェードがついた電気スタンド。鏡つき食器棚には皿、鉢のたぐいが詰まっている。一隅に古新聞。ストーヴの前に脱脂綿の包みが置かれている。

I

グランゾーギュスタン河岸

龍騎兵中尉、そして半分は赤く残りの半分は黄色い布製の人形を腕に抱いたレアが登場。

パトリス　（龍騎兵中尉に扮して）他人の子供は好きじゃないね。

レア　パトリス、この娘を見て。眼も鼻も口もわたしにそっくり。髪の毛をこんなふうに切られちゃって、悲しいわ。これじゃ中国人の女の子じゃない？　わたしはブロンドよ。あなた、この子が自分の子だってちゃんと

承知してるくせに。

幼児用の小さなラッパを吹く。人形が泣く。ロイド・ジョージ登場、彼はもとイギリス首相に似ている。

ロイド・ジョージ　おい……おい……おーい……

パトリス　やれやれ、情けない結末だ。

人形をつかみ流れに乗せて姿を消す。ロイド・ジョージは自室に入り、レアがその後を追う。

Ⅱ

ロイド・ジョージの部屋

レア　怖いわ、ドヴィック

ロイド・ジョージは部屋を横切り、寝台のシーツを持ち上げて慄えているレアに枕の上に置かれている少女の頭を見せる。

レア　ロイド・ジョージさん。この子は誰か知っていますわ。

粗々しい身振りで、ロイド・ジョージはシーツをすっかりはがし、少女の身体をむき出しにする。いうまでもなく、それは肩の高さで切断された少女の上半身で、他の部分はなくなっている。龍騎兵中尉に扮したパトリス登場。頬がこけて、眼のまわりにはひどい隈ができている。レアは小さな哨所に駈け込み、数秒間悲痛な叫びをあげる。ロイド・ジョージとパトリスは石のように動かぬまま向き合っている。レアが二人のところに戻る。

レア　（パトリスに）さあ、さあ。あなたにはつながりがないことはよく分かったわ。

パトリスは寝台の少女の上半身のわきに潜り込む。

ロイド・ジョージ　（レアに）これ！　ちょいとわしの腕前を見るがいい。

右手から退場し、じきに若者を脇に抱えて戻って来る。若者をテーブルに乗せ、首を鋸で引く。作業のあいだじゅうおそろしい崩壊音と鐘の音が聞える。

ロイド・ジョージ　（バラバラの身体を持って来て）こういう仕事には根からの素人でな。

レア、肩を掠める。寝台の上にかがみ込んで、少女の眼を抜き取る。眼は駝鳥の卵ほどの大きさ。

レア　パトリス、わたしの眼よ。わたしの眼だってば！

パトリス　（壁の方を向いて）そんなもの見たくない。そんなもの見たくないよ。

ロイド・ジョージが登場、手に持った黒いスーツケースをレアに差し出す。

ロイド・ジョージ　奥様、これがお子さんの不思議な亡骸です。

レアはグラン・ゾーギュスタン河岸を突切る。彼女は泣きながら姿を消す。

喪服姿のモラン夫人と故モラン氏が登場。モラン氏の髪はぼうぼうで、碁盤縞のズボンを穿いている。ひとりでに明かりがつく。全員食卓を囲む。ただ一人、パトリスだけが相変わらず寝台に横たわっている。ロイド・ジョージが四人分の食器を並べ、彼は沢山の料理を運ぶ。伊勢えび、鳥肉、デコレーション・ケーキ、氷菓子、果物の盛り合わせ（ピラミード）。彼はときどき小鳥を放つ。レアが戻る。自分の席に就く。全人物が食事をし、黙って盛んに身振りを示す。モラン氏はシャツの腕をまくり上げ、紅を唇にひどく厚塗りして、縮みの帽子を頭にのせたモラン夫人はじっと動かない。

ロイド・ジョージ　（レアに）さあ、女の子の胴の下に、龍騎兵青年士官の膝を置くんじゃ。女の子が肩のところで切断されたとは、まさか気付かれまい。膝と脚で自然な盛り上がりが見えるはずのところで、シーツが窪んでいては犯罪が露見するやも知れぬ。

レア　その通りだわ。

起き上がって龍騎兵青年士官の膝を、ロイド・ジョージの注文どおりに並べる。次いで食卓に戻る。モラン夫妻は何も見ないふりをしている。

ロイド・ジョージ　（レアに）奥様、食器棚の上を見て下され。

レアは眼をあげて、食器棚の上から彼女を見おろしているパトリスを見る。ロイド・ジョージが起き上がり、レアの腕をとり舞台の前面にまで引っ張っていってレアに。

ロイド・ジョージ　何てよく降る雨じゃ！　わしは二度とあのようなことはせぬ。お前は心ならずもわしの共犯者じゃ、もししゃべれば、警察に引渡すぞ。それに、もうけりをつけにゃならん。わしは河に捨てるが良いと思うが。

レア　そんなことしたらきっと癖になってしまうわ。わたしは、鍵をかけて、薄い錫の板がのっけてある古本屋のあの陳列函の方がいいと思うわ。

ロイド・ジョージ　ほ、ほう。それは名案じゃ。

レア　遅すぎるわよ。

龍騎兵士官に扮したパトリスが覗いていた場所から降りて、火に近づく。脱脂綿の包みが燃え上がる。モラン夫人が大きな悲鳴をあげる。パトリスは静かにまた食器棚の上にのぼる。

ロイド・ジョージ　（笑って）はっ、はっ、はっ、は。被害者自らへまをしよるわ。

全員がまた食べ始める。ロイド・ジョージは、起き上がる度にもっぱら新しい料理を運んでくる。

モラン氏　ところで、その晩は、海が荒れていた。網一杯の鰯が獲れるところだったが、暗闇に雷、豹の毛皮のことはいわずもがな、とりわけボイラー室の黒人たちが……おい、女房！　違うとはいうまいな。モランの奥方、わが女房どの。こんなに鱈腹食ったのははじめてだ。

ロイド・ジョージ　きみ、わしはね、いかに事を運ぶべきかは知っておる。じゃが、港はどこかね。

レア、不意に起き上がり、夢遊病者のしぐさで、気付かれぬままに食器棚のところにある椅子に近づき、新聞紙でパトリスの頭を掩う。食卓に戻り他の連中と一緒に食べ続ける。

モラン氏　しかし、皆さん、あんたがたはわしの話に興味がおありに違いない。ところで、その晩は、海が荒れていた。網一杯に鰯が獲れるところだったが、豹の毛皮も船長のナイフもコップというコップも壊れてしまって……

このとき風がパトリスの頭を掩っていた新聞を運び去る。レアが大声を出す。モラン氏が起き上がってロイド・ジョージの腕をとり、グラン・ゾーギュスタン河岸の方に連れて行く。

モラン氏　あの女は、あなた、狂っていますよ。ほら、あそこです。ごらんなさい、狂った女を、狂った女を！

二人退場。

モラン夫人　全部見ちゃったよ、レア。さあ、おいで。

彼女たちは寝台の方に向う。そこから二本の枯枝に似た腕がゆっくりと差し上げられる。だがその先には、真っ白い大きな手が花のようにくっついている。

モラン夫人　ああ、お前。そばに寄るんじゃない。この娘は癲病やみだよ。

レア、膝まづく。

レア　この子はわたしの切長の眼をしている。髪の毛はわたしのブロンド。わたしの明るい口。ひとは恋患いなんかで死にはしないということをちゃんと認めなければならないわ。

第一幕、第二場おわり。

第二幕

第三場

舞台はホテルの一室をあらわす。寝台、テーブル、複数の椅子、鏡付きの衣装だんすなど。レアが寝台に横たわっている。その枕もとにパトリス。

パトリス　まわっている。まわっている。
レア　誰が？
パトリス　勿論、テーブルじゃない。
レア　地球がまわっているわ。
パトリス　お黙り。ぼくの左の眼の中に太陽がいるんだ。
レア　ほら、またはじまった。
パトリス　左の眼の中に太陽がいるっていったんだ。
レア　あなたに逆らったりしたかしら？

沈黙。

レア　それで、パトリス、右の眼には？
パトリス　山がある。
レア　見られるの？
パトリス　その気ならね。

レアはパトリスの右眼の上に身を乗り出して、じっと見る。

レア　これはなあに？
パトリス　車輪だよ。
レア　それじゃ、その後ろは？
パトリス　後ろはね、空っぽの石切場さ。
レア　そうね、人夫さんたちが手を休めているわ。
パトリス　そうだろう。
レア　石の中に光っているのは何でしょう？
パトリス　道具だ。美しいだろう？　ニッケルで出来ているのさ。一番小さいのはバラ色の爪にそっくり、一番大きいのは斧のようなものだ。斧を持っているのは男なんだが、わかるかい、レア？
レア　とてもよく見えるわ。疲れているみたいよ。
パトリス　とはいってもね、その男には食べ物も飲み物もある。
レア　水浴びをするんだわ、変なの。

パトリス　水を浴びたからって、何がおかしい？
レア　男が溶けて行くのよ。白くなってしまったわ。獣があの人に喰いついている。
パトリス　可哀そうなやつらだ。
レア　可哀そうですって？　あの蝮が？　燃えさかる鱗をつけたあの爬虫類が？
パトリス　やつらはきみに何もしていないよ。
レア　それじゃ、わたしの両手にキスしてちょうだい。

パトリスはレアの両手にキスをするがたちまち跳び退る。

パトリス　あち、ち！
レア　わたしが何かして？
パトリス　火傷させやがって。

レアの両手から湯気があがる。レアは洗面台に向い、両手を水に浸す。

レア　あなたこそ、わたしをビックリさせといて。
パトリス　だからさ、これからはきみの眼を大事にして、こちらの眼はそっとしておいてくれよ。

レア、泣く。

パトリス　こんなことで泣くことはない。
レア　世界にうんざりさせられているのよ。
パトリス　世界って、そんなもの何処にある？
レア　ね、パトリス、わたしがここにいるのよ、ここにね。
パトリス　ごめんよ。レア、いや、世界くん。

レアが寝台に身体をのばす。

レア　パトリス、いらっしゃい。
パトリス　いやはや何て長いんだ。（電燈を指して）灼きごてに乗っかったエクアドルだ。で、奥さま、奥さまはどんな国をお救い遊ばしました？　タヒチでしょうか、熟したバナナみたいに財布がペチャンコになるタヒチ？　大使諸公のおみ足にはレースが貴重なアクセサリーと相成るあの春の履き物、タヒチですかね？
レア　タヒチですって？　わたしのお尻が？　げすだったらありゃしない。
パトリス　おお、レア、ちょっとばかり品がないよ。まわっている。
レア　お馬鹿さんね。テーブルがまわる訳はないでしょ。
パトリス　地球がまわっている。ぼくの左の眼の中に太陽があるんだ。
レア　もう一度坐って、わたしのいうことを聴いてちょうだい。
パトリス　でも、地球はまわっている。
レア　あなたの勘違いよ。

パトリス　ぼくはもう何もしていない。ぼくは空間で回転する装置なんだ。頭脳があるっていうんだろう？　脳は労働に毒されている。強直痙攣の状態なんだ。温和しい動物だよ、こいつは。ぼくも、昨日はまだ物を食うことができたが、今日は、レア、すっかり駄目になった。脳味噌が腹の中におさまってしまったんだ。この賤しい奴のしたい放題さ。心臓はどこかって？　寝台の中を探すがいい。胃袋かい？　胃袋ならテーブルの下でぼくの足をしゃぶっている。肝臓は鏡に向かってしかめ面だ。脾臓は抽出の中の栓抜きのわきにいるし、肺は面白がってきみのカナリアを嗅ぎ出している。可哀そうなぼくの脳味噌。あの神聖な捏り粉の塊は、どんな仕事にも耐え忍ぶんだよ。レアは、それを嘆いたりしはしないだろう？

レア　あら、かなり早くまわるにしても、余り下手くそにまわらないものだってあるわ。どっちにしても、わたしはこんな戦を望みはしなかったわ。

ドアをノックする音。

パトリス　どうぞ。

屠殺人夫　奥さん、こちらにお渡しいただく物が何かありますか？

レア　ええ、あるわよ、ガスパール。台所のテーブルの上に、紐でくくってあるでしょ。

屠殺人夫　はい、かしこまりました、レア奥さん。

退場。

パトリス　あいつ、何者だい？
レア　労務者よ。
パトリス　で、何をしている？
レア　牛をばらしているわ。
パトリス　可哀そうな牛たち。
レア　職業に愚かなものはなくてよ。

屠殺人夫が戻って来る。

屠殺人夫　ところで、レア奥さん。もうお宅には寄らないことにします。わざわざ足を運んでも無駄なんでね。骨や撒き餌じゃ碌な食事になりやしない。食べかすは兵隊にでもとっておいてやるんですな。たとえ爪や髪の毛がくっついた皮をくれたって、鐚一文だって余分に払ってやるものか、牝泥棒めが。

退場。

パトリス　あの男は、何をしにここに来たんだい？
レア　何も。あのガスパールって男ね、とても器用なのよ。椅子の藁は詰め替るわ、窓ガラスは入れ替えるわで。
パトリス　あの面は、どこかで見たような気がするな。
レア　ねえ、パトリス、その話はやめて。あなたったら、寝る前にいつも明りを消してくれっていうわね。

パトリス　ぼくが？
レア　そうよ。それに、あなたがあれほどご自慢のおつむも、今ではただの代用品。お食事を待つあいだに庖丁さばきや森、そして言葉の中にある動物の衰退の夢ばかり見ているんだわ。――お食事が済むと、こあかしという魚の形をしていて、色の火事のような巻雲という名の雲みたいにパトリスさまが横におなりになる、香りの高い草が生えている牧場か原っぱの夢。
パトリス　ばかな。この屋敷の樋は、そう簡単に水が切れない。
レア　あなたにはそう思えるのね。
パトリス　昨夜もまた誰かが喚いていた。「そこで首尾よく首をかき切ったかい？」って。ぼくは下着のまま立ち上って「いまは八月です。星の雨ですよ」と答えてやった。隣りの男は何とやり返して来たかわかるかい？
レア　隣りの人は一体何ていったの？
パトリス「あり余るほど血があれば、絵でも描くさ。世間の憤慨を買うことはない」だってさ。
レア　なるほどね。
パトリス　きみは、勿論、あいつの言うことはもっともだといいはる積りだな。
レア　何の話よ。
パトリス　宿泊人たちの言い分のことさ。
レア　ご免なさい。よく分からなかったの。
パトリス　ぼくが自分の理性を失ってると言いきれるかね。
レア　その正反対よ。理性とは平衡なりでしょ。あなたはかなり上手に梯子を登るわ。
パトリス　ああ、その髪ったらぼさぼさもいいところだ。

レア　でも何とひどいお化粧だこと。
パトリス　その通り。身体中に見え見えだったよ。その胸はダイアモンド製の型だ。きょう日の女性はバラ色の下着をお選びさ。きみ。きみを輝やかせるのは口なんだ。その口がまるで採血所だぞ。
レア　おや、まぁ。詩(ポエジー)だわね。
パトリス　（彼女の頬を張って）　罰でも喰らえ！
レア　あなたと一緒じゃ嬉しくないわ。
パトリス（平手打ちを加えて）これでどうだ？
レア　不仕合せよ。
パトリス　（髪を掴んで彼女を引摺りながら）ぼくが一生振子時計で通すかどうか知りたくなるだろう。というよりも振子時計の振子、もっとうまい言い方をすれば振子の首吊り人で。
レア　許して、パトリス、許してちょうだい！　もう二度と言わないから。私はこれからもずっとしあわせよ。
パトリス　レア、ぼくを見ろ。ぼくは立派な者だ。でも、何か足りないものがある。
レア　一体何が。
パトリス　財産さ、肌の手入れ一切と肌着のための元手だよ。元手？　ぼくは元手といったね。そうだ。元手だ。何よりも大事なもの、それは下着類だ。カフェに入るとする。ダブル・スカートが顔をかくしてくれる。天井に吊したスカートは、まるで洋梨子(ポワール)だ。するといきなり人びとがキスを交す。両足のふくらはぎに我と我が手でピンを突き刺す。そこであちこちから聞こえてくる、「まあ、何て素敵なの！」偶然というこの玉を、ぼくが階段で見つける。いや、違うよ、レア。ぼくを導いてくれるのは香りなんだ。ぼくは毎朝この家を金ピカに磨きなおす。なぜって古いわが家は、ぼくら二人が揃って狂ってしまった船同然だからね。畜生！　ドアを開

けろ。これには動作が伴わなくてはならない。ぼくは元手といった。肌の手入れ一切と、肌着のための財産だ。

レア　肌ですって！

パトリス　おお、この肌に手を触れるな。ぼくの肌に、ぼくの羊皮紙にかな？　それに肌、きみ自身に。

レア　パトリス、あなたって情知らずで意地悪よ。

パトリス　ねえ、ぼくはぼくなりにずいぶん骨を折っている。ぼくにしか関係ないことだが。ぼくの骨はぼくのものさ。他の人間は何といった？　愛とは自我の外に出たいという欲求なりだって。だからきみには次の質問をする。ぼくに何が残っているか見終わったかい。ぼくの骸骨を見終わったかっていうんだ。きみの眼は充分に透視ができるのかい。

レア　どうしろっていうの。

パトリス　へえ、おどろいたな。何を聞いているんだい。本当にあれが聞えるのか。あの絞首台がやってくるのが聞えるのかい。独楽だ！　おお！　骸骨と独楽（寓話）だ。

高さ二メートルの骸骨から石膏が剥げ落ちた
蛆虫どもはもう欲しがらなかった
それほど骸骨は跪く美しかったから
食卓に就いたとき残骸で何を作るの
ぼくらはそれで動物を作るよ
その訳はぼくの可愛い女の心臓の弾み
この独楽にある

（心臓それとも女の子？）
―両方さ。

レア　それよりも先のことを考えてよ。
パトリス　きみのお腹に入っている子供がね、レア、ぼくには大迷惑なんだ。引き摺り出してもいいんだぜ。
レア　あら、安心してよ。手間はかからないわ。

退場。

パトリス　（独りで）何て厄介な話だ。だが何という太陽！
モラン夫人　パトリスさん、今日は。
パトリス　お目にかかれて幸いです。モランの奥様。
モラン夫人　幸いはお互いさまよ、聟どの。
パトリス　ぼくを聟と仰言るんですね。どうぞお掛けになってお楽になさって下さい。あなたは死ぬことにきっとご執着なさっていますね。
モラン夫人　生きることにといいたいんでしょう。
パトリス　生きることに、死ぬことに、ぼくはあの歌を知っていますよ。モランさん、あなたの娘さんは、この件に就いてはのらりくらりですね。
モラン夫人　この娘には執着していることがあるんです。

パトリス　ぼくはね、あなたには彼女の言うことを何でも聞かせておいたんです。彼女は死ぬことに執着しているんです。
モラン夫人　パトリスさん、あなたって一体何者なの？
パトリス　ほら、やって来た。

ドヴィック登場

モラン夫人　ドヴィックだわ。今日は、聟どの。
ドヴィック　あなた。ぼくには構わないで下さい。（パトリスに）大いにきみが気に入ったよ。
パトリス　ドヴィックさん、簡単な質問を一つ。あなたはこの台本の作者をきっとご存知ですね？
ドヴィック　それは私の親友だ。
パトリス　違いますよ。
ドヴィック　ともかく私の親友だ。
パトリス　それでは一寸ここに来てくれるように頼んで下さい。
ドヴィック　おーい、おーい！　作者よ！　作者よ！

全員声を合わせて歌う

おやまあ作者がやって来た、ねえ　きみ達者かね。

おやまあ作者がやって来た、あなた、お元気？

作者登場

作者　今日は、モランさん。今日は、ドヴィック。そして今日は、パトリス。
パトリス　ちょうどいいところにお見えになりましたね。というのは、この結末を一体どうなさるお積もりで？
作者　おやおや、お若いの、随分のめり込んでいるようだね？
パトリス　でしょう？　もうひと言。
作者　どうぞよろしく。
パトリス　先生、あなたの本心はばれているんです。やる必要があるということを納得しなければならないのですか？
作者　毅然としてやることをね。
パトリス　それでは話すのは無駄です。ここの誰にももう発言権はありません。
作者　聴きたまえ、お若いの。私はきみの事情にはまったく関心がない。観客の関心だって全然惹きっこないさ。
パトリス　そうですかね？
作者　きみがぼくを理解して、きみにそのことがわかるように、私には自分のことが解っている
ドヴィック　失礼だが
パトリス　ぼくらをそっとしといて下さいよ、あなた。そちらは女性にかまけていらっしゃい。ぼくはこちらの方に話しているんです。（作者に）一と言ご助言をいたゞきたいのですが？

作者　きみ、きみは私に話をしてくれというんだね？　ところが私はいま自分の大きな弱点を発見しようとしているのだ。見つかればきみと同じような行動に出るだろう。でも、そうなったら、引き退らしてくれ給え。

作者退場。

パトリス　ヘラクレスにかけて、やろうぜ。

椅子をつかんで、すべてを破壊。ドヴィックとモラン夫人を撲殺する。舞台は血だらけになる。照明が消え、パトリスは闇の中で叩き続ける。

レア　（舞台の袖で）あれ！　あれ！　マ……　マ……　ママー、ママ、ママ、ママ、ママー、あ、あー…

再び照明点灯。パトリスはすっかり腰抜けになっている。モラン夫人とドヴィックが羽目木の床にのびている。子供を一人抱えてレアが登場。

レア　（陽気に）男の子よ（恐怖とともに我にかえって）あゝ、私たちのお部屋が！　しかも私があなたの息子を生んでいる間によ。

パトリス　うん、ごらんの通りさ。ぼくが独りぼっちにされると何が起こるかきみには分かっている。子供を見せてくれ。

レア　余り時間はかからなかったでしょ？

パトリス　立派な身体つきのようだ。マントルピースの大理石の上で寒くないと思うかい？

レア　私が毎朝鏡を磨いて火を起こすわよ。でも、ここだけの話、ベッドの中のほうが良さそうね。

パトリス　広場はまだ暑いな。立像のかけらを掃除してもらいたいね。（子供を受取り頭上高くさし上げて）ギヨタン、お前の名前はギヨタンにしよう。お前は一生傑作の地位を占めるんだぞ。あそこ、ミロのヴィーナスの台石の上にある二軒のアパルトマンの間にな。

レア　自分の息子を何にしたいっていうの？　自分のむ、む、自分のギギ、自分ギギヨヨ、自分のギヨを？

パトリス　おい、これは立派な役回りだよ。（子供をマントルピースに乗せて）おとなしくしていろよ。さあ、今度は、ギヨタン、ぼくの腕においで

子供は危く動きそうになって平衡を失い落下して死ぬ。

レア　ああ、ああ、ああ！　……人殺し！　人殺し！　この男、私の恋人、私のパパ、私のパパ、私のパトリスが、私のギギ、私のギギ、私のギヨタンを殺しちゃったのよ。（声の調子を変えて）余談になるけれど、別の名前をつけてやることだってできたでしょうに。子供殺し。

パトリス　止めろ、レア。炬火をつけて、ぼくの旅行ケースの支度をしてくれ。ぼくは町内に用事があるんだ。

レア　パトリス、おやすみ。

パトリス退場

警官　（登場しながら）あの大騒ぎの主はあなたですか？　どうしました、奥さん、泣いていますね？　誰かに打たれたんですか？

レア　あら、何でもありませんわ、お巡りさん、子供が転んで麻疹に罹ったんですの。

いきなり幕がおりる。

第三場おわり

第四場

舞台は、鉄道の駅、食堂車、海岸、ホテルのロビー、手芸用品店、地方の小都市の大廣場を表している。円盤型信号機、電信線、食器を並べた数脚のテーブル、波の泡を表す大きな綿の塊、船の帆柱、緑の植物、庭椅子、手芸用品店と記した看板、探検家の像を適宜に配置。投光器が舞台の進行に対応する部分を照らし出す。

幕が上がると舞台中央にただひとりレア。モラン夫人が喪服の正装で登場。子供を一人腕に抱えている。彼女の両側に一本の紐に繋がれた犬、白いフォックス・テリアと灰色のブルドッグがちょろちょろしている。

モラン夫人　申訳けございませんが、私の子供を一寸の間抱いていて下さいまし。

レア　何を仰言いますの。あと五分で列車が出るんですよ。

モラン夫人　あら、ご心配ご無用ですわ、じきに戻りますから。わんちゃん達の切符を買って来る間だけで戻っ

て参ります。それに何をご心配なさいますの、うちの主人がこの列車に乗っているんです。

暗黒、つづいて点灯、ムッソリーニがテーブルに着いている。子供を抱いてレアが登場、あとから犬がついて来る。何人かの乗客が食事中。レアが着席し足もとに犬が伏せる。車掌が通りかかる。

レア　もうお食事ですの？

車掌　十二時五分ですから。

レア　あちらに着くのは

車掌　三時です

汽笛。蒸気を吹き出す音。列車が動き出す。

レア　（昇降口で）止めて、止めてちょうだい。子供を預けられちゃったのよ……　そう、この子は私の子じゃないの……　あそこ、あの女の人！　あの人の子だわ……　あそこ……　あそこ……　あそこのあの女……

車掌　（笑って）　まあ、まあ、奥さん。あの女は前にもやったことがあるんです。だからその子は保護しておやりなさい。後になって後悔なさいますよ。

レア、席に戻る

レア　何をしたっていうの？　私が子盗人ですって？　おお、冗談じゃないわよ。でも今となって厄介払いをする術は。愛情なんて全く面倒臭いものね。

ムッソリーニ　（座席から）海の空気はお子さんに良いですよ。

レア　その通りです。

ムッソリーニ　いいかね、出来ないんだな……

レア　（相手をさえぎって）失礼ですがお間違いになっていますわ。あなたの奥さんだと思いますが、あの女性がこの子と犬を私に預けたんですよ。ただこの年では、子供と犬と一人の男を厄介払いにするなんて出来ないってことだけはお分かりね。

ムッソリーニ　ちょっと、あなたのような方が、子供と犬と一人の男をなんて仰言ろうとは。

暗黒、やがて点灯

ムッソリーニ　（独白）海だ。何という泡だ。雫の一滴もありはしない。建物の屋根の上まで泡だ。それがきちんと間を置いて上がって来る。これほど胸にずしんと来る泡は見たことがない。それに橋の上に築かれたこの町。海、海は一体どこなのだ。海は二尺下なんだ。肝を冷しちまうよ。

暗黒、やがて照明。子供と犬を連れたレアが下手から、老家政婦が上手から登場。

レア　奇妙なところね

家政婦　こちらにご逗留なさる義理はございませんよ。

レア　犬にやる骨を少々手に入れたいんだけれど。

料理人が下手から登場、野菜の皮を剝く。二番目の料理人が後に続く。彼も野菜の皮を剝く。最後に燕尾服を着て白手袋をはめた人物が登場、同じく野菜の皮を剝く。

燕尾服の男　（家政婦に）おい、きみ。こちらのご婦人にお返事しなさい。かしこまりました、骨を差上げましょう。

レアが大喜びの表情を見せる。犬と子供をドレスに包み、人目にさらすのを頓着せずに両脚を前後左右に揺する。

レア　ブルドッグはご不満ね。あら、私ったら、この子の足に気づかなかった、この子の足は虎の足だわ。

ムッソリーニ登場、レアの脚の動きに気を取られているかに見えた料理人と燕尾服の男が怖えて逃げ出す。レアは犬を床に降ろし、子供を膝に抱く。ムッソリーニは、一跳りでフォックステリアを楽屋に跳転がす。

レア　野蕃人！　あの子の顔と耳に怪我をさせてしまって。

ムッソリーニ　薬屋は犬のために店を開けてはいない。行って介疱してやりなさい。

レアは子供を床におろす。

レア　おお、この黒い靴、編み紐つきのこの靴、おまけにこの黒い靴下にはぞーっとするわ。別のを買ってやりましょう。

ムッソリーニ　駄目だ。その必要なし。

レア　いいえ、買いに行きますとも。

暗黒、続いて点灯。手芸用品店で

レア　子供向けの白い革靴が欲しいんですが

用品店の女主人　紺青の方がお綺麗でしょう。

レア　いいえ、白いの、白い靴が欲しいの。

女主人　何というお好みでしょう。

レア　好みは人さまざまよ（靴を見定める）、あら、底がコルクだわ。これじゃきっと実用向きじゃないわね。水が滲み込むから。

女主人　それでは葡萄酒の瓶の栓を水に浸したらどうなるんでしょうね。

レア　いいわ、紺青の靴を頂きます。

暗黒、つづいて点灯、

レア　（着席して）わたしはアフリカのセントアフリカに行くのよ。お前たちを連れて行く訳にはいかないわ。
ムッソリーニ　我慢なさい。じっと我慢なさいと忠告します。探しもしないのに亭主が、作りもしないのに子供が、買いもしないのに犬がいる。
レア　この子は捲き毛、その上にブロンド。黒い大きな瞳。家にいる男、わたしのパトリスにそっくりだわ。子供は手もとに置いておくわ。可愛すぎるもの。

暗黒、つづいて青い照明

レア　（子供の手を引いて）光は暗いし、空気はどんより。ここは鬼火の町だわ。それにあの人たち、あの黒い亡霊たち。何もかも気味が悪い。（駈け出す）あれまあ、一人捕えちゃった。ムッソリーニよ。
ムッソリーニ　はてさて。きみが一度も子供を持ったことがないのはよく分かっている。きみは頭のおかしな女みたいに走るし、まるで独りきりでいるように駈け出す。だから餓鬼を地面に引き摺っているんだ。
レア　なるほど。そちらが言う通りだわ。わたし、忘れていたんだわ、子供の手をつかんでいることを。ところで、何よりも私に馴々しい口の利き方をしないでちょうだい。ぞっとするわよ。
ムッソリーニ　ほら、また始った！

ムッソリーニ、子供、それに犬達が泣き出す。

レア　どうしてそんな風に泣いたりするの？

ムッソリーニ　ぼくはきみを悪く思ったりしてはいない。（ポケットから子供の黒い靴をとり出して）さあ、もう一度その子に古い靴、黒い靴を穿かせてやるんだ。今夜はきみの後を追いかけて走れるだろう。靴が駄目だったのさ。

レア　ああ、私の心臓を取替えられたら

青い靴を投げ捨て、子供に黒靴を穿かせる。

レア　それに、おでこに垂れ下がっているぼうぼうのこの髪の毛も。この子のきれいなブロンドの捲き毛はどこにいってしまったの？

ムッソリーニ　いかにも、その子は鬘を被っていたのさ。

レアは子供の手を取って次のように言いながら、猛烈な速さで舞台の周囲を走り出す。

レア　あら、本当。今ではこの子ったら私と同じ速さで走っている。同じ速さで、同じ速さで走っているのよ。

停止して、子供を腕に抱き上げる。

レア　坊や、坊や。私たちはもう二度と別れたりはしないわ。もう鬘なんて要らないのよ。坊やの正体の見分けがつかないように、髪を黒く染めてあげるわ。

退場。犬たちが後を追う。ムッソリーニは腰をおろして頭を両手で抱える。幕がゆっくり下りる。

第四場と第二幕おわり

第三幕

第五場

舞台はとあるホテルの真夜中のロビーを表わす。幕が開く途端に時刻を告げる大時計の音、電話の呼出音、階段の足音、それに悲鳴がきこえる。宿泊客を乗せたエレヴェーターが全速力で上下する。イヴニングドレス、背広、シャツ等々をまとった人物たち。

さまざまな声　五三号室だ。五階の五三号室よ。五階です。五三号だって？　女性だ。彼女のこと分かっているの？　独身なのよ。アメリカ人さ。子持ちだわ。売春婦だよ。可哀相な女、どうしたのかしらね？　狂っているのさ、あの女は。彼女には何もないのよ。ヒステリーだ。手当り次第にぶち壊しちまうんだ。家具を叩き壊すんだぞ。窓ガラスなんて破ってしまうわ。建物ごと丸焼けにしようとしてるんだ。

一段と大きな声、上の方から聞こえてくる。開けられません。開けてくれませんか？（沈黙）駄目か？　ドア

をぶち破れ。

大きな悲鳴。つづいて完全な沈黙。エレヴェーターが降りて来る。両手が血だらけで、白いドレスがぼろぼろになったレアが二人の警官の間に挟まれている。見物のため急いで降りて来る宿泊人たちで階段は雑踏。

警官一　（管理人に）女の名前は？

管理人　存じません。ここでは、マダム・レアと呼ばれています。

警官二　女は警察への届出カードに記入しなかったのか？

管理人　警察ですって、それはそちら様のお仕事で

警官一　いかにもその通り。となるとマダム・レア、レアがここに存在しているのでご同行願います。

レア　（昂奮して）お伴しますとも、どこへなりと、どこへなりと。

笑声

警官二　この女は頭がおかしいか、さもなければ酔っ払っているんだ。管理人さん、この女の非行をご存知かな。

管理人　この方のご本人を知らないって何度も申し上げるのはとんだ骨折りで。

警官一　それは理由にはならんよ。薬を打ったり、吸ったりしているかも知れんのだ。

管理人　レアに　薬を打ってるんですか？　吸ってるんですか？

レア　打ちも吸いもしていないわよ。

警官一　（宿泊人たちに）ここにおいでの殿方諸公やご婦人の中で、どなたかレア夫人をご存知かな？　誰か、この女性に就いてわれわれに話をきかせてくれますか？

全員　レア夫人だって？　レアさん？　レア夫人？

警官一　それでは、レア夫人が何をしたというのかね？

管理人　この女性は鏡付きの衣装箪笥を壊しました。化粧台を粉々にして、金魚鉢の金魚の首を絞め、部屋のカーテンを燃しました。これがレア夫人の仕業です。この女は仕業の弁償さえもする必要があるでしょう、レア夫人は。

警官一　今の話を聞いたね、奥さん？　事実を認めるんだね？

レア　管理人さん、それが五三号室だろうと何号だろうと、私がここに来たのは一つの番号を独占するためではないんです。あなたは私が鏡付きの衣装箪笥を壊したと仰言っています。パトリスは私を極地に連れて行ってくれると約束していたんです。その約束は果されたでしょうか？　あなたは私が化粧台を粉々にしたと仰言いますね？　パトリスは手製の星を私に幾つかくれると約束していました。螺旋状の発条を押すんです。そうすると海や木々や雲が見える筈なんです。私が見たのは何でしょう？　あなたは私が金魚鉢の金魚を絞め殺したと仰言っています。私の方は聖パトリスの身体の中で売れるものは全部売ってしまいました。残った部分は旅に出ました。その残りは戻っているのでしょうか？　ああ、もしそうならば、私に教えて下さい。そうすれば私はあなたのために自費で人工の洞窟を何本も築き、絹と人肉で作った振子時計を買って差し上げるわ。それにお宅の中庭は、鯉や聖体秘跡が泳ぐ水面で一杯にしましょう。部屋のカーテンですけれど、あなたがお気に召すように火を点けたんです。マルブルー、マルブルーは戦場で死にました。お宅のホテルのバルコニーに、彼の口を復元なさったのは正しいことです。彼の眼を開かせるために、出来ることはすべてやりました。でも

お宅の壁は鉄で、瞳はニッケルで出来ています。あの壁が、よく働く私のお手々、フランス女の可愛い蛙ちゃんを骨と皮にしてしまったんです。

さまざまな声　素適だ。頭がおかしいんでは？　いい感じだわ。おかしいけれど可愛いね。

宿泊人たちがゆっくりと退散する。

管理人　皆さん、お願いです。お部室にお戻り下さい。少々ご遠慮いただきたいんですが？　私自身スキャンダルに参っているんです。それも、幸いなことに終りました。終り良きものはすべて良しですな、皆さん。お寝みなさいませ、ご婦人方。

管理人　（警官に）彼女の件は何とかおさめて下さい。騒ぎはもうおしまいですな。私は何も要求しません。そっとして置いてもらいたいもんで。お寝みなさい。

退場

警官一　レアさん、同行願います。

警官二　同行するんですよ。

レア　お巡りさん！（ドアを指して）あのドアを見て。

警官一　えっ！

警官二　見えとるよ。

レア　いまにも開きそう。開くに違いないわ。
警官一　そのとおり、あのドアは開く筈だ。いっそこの足で開けに行こう。
レア　（悲し気に）それには及ばないわ。お巡りさん。もうじきひとりでに開くわよ。

ひとりでにドアが開く

レア　言葉一つで何ができるかお分かり？
警官たち　（一緒に）言葉一つで何ができるんだ？
レア　すぐに分かってよ。ヒカリと言って。
警官たち　（一緒に）ヒカリ。
レア　曖昧な調子でお二人は光を追いかけたわ。ここでは何も動かなかった。光は好調ね。光はひとりでに動くのよ。

警官たち、肩をすくめる。

レア　今度はヨルと言って。
警官たち　（一緒に）逆らうのは止そう。ヨル。
レア　夜があなた方を待っている。あなた方を追うために、影があなた方が歩くのを待つように。夜は私たちなしで済ますの。夜はたった一人で立派に通って行きます。でも、私は言う、いまにも言いそうになる。それな

ら私が彼を支えてあげるって……そして彼が通り抜ける……まるで私の胸で形どられ、私の口から飛び出したような**パトリス**。

パトリス登場。警官たちはぎょっとさせられて逃げ出す。

レア　おお、パトリス、何と運が良いこと。

二人が抱き合う。

パトリス　もうぼくを待ったりしていなかったろう？　まだ待っていたかい？

レア　ほとんど待たなくなっていたわ。でもね、昨日苺を食べながら独り言をいっていたの。「テーブルの上のクリームにまた逢えるかしら？　いるべき場所にいるパトリスに」って。そしてね、お砂糖を舐めたの。ああ、どれ位お砂糖の無駄舐めをしたかしら。

パトリス　それで家の方は？

レア　電気屋さんたち委せにしてあるわ。

雷鳴

パトリス　あれは何の音だ？

レア　雷よ。
パトリス　でも灼けつくようなかんかん照りだよ。
レア　今日は聖体のお祝いの日だわ。

二、三人の子供が登場。

子供一　パトリスさん、靴の中に何を入れてるの？
パトリス　棕梠の木の蔭にいる象たちだ。
子供二　ぼくたちを見ているあのライオンは？
パトリス　あれはね、坊や、自由さ。
子供三　あの自動車はぼくたち用なの？
パトリス　あの車は壊れないし、奥行きがある。
子供二　何かもっとちょうだいよ。
パトリス　レア、子供たちにやる物は何もないのかい？
レア　みんな、お父さんをそっとして置いて上げなさい。
子供たち　でもパトリスさんはぼくたちのお父さんじゃないでしょ？
パトリス　それじゃきみたちのお父さんて何さ？
子供一　ぼくの父ちゃんはパン屋の馬なんだ。
子供二　うちのお父さんは母さんのミシンよ。

パトリス　（三人目の子供に）で、きみのお父さんは何だね？

子供三　ぼくのお父さんかい？　パトリスさん。　それよりも、アラブ人の中で戦っているきみの息子さんといってもらいたいよ。ぼくの息子はね、アップル・パイみたいなでかい顔に巨人の耳がくっついている。あの子の財布の中は髭もじゃで、どのポケットにも眼があるのさ。世間じゃ変わり者だって言われているけれど、世間の口ってうるさいね。そうだろう、パトリスさん。あなたは血を造るために黒人の女性たちを買って、余った人たちは飾り職人に売っているって噂だよ。こちらはそんな汚ならしい商売には、へどを吐きそうになっちまうよ。ぼくの息子がそんなことを知ったら、びっくらこくだろう。息子はね、レアの親友なんだ、そうだね、お嬢さん？　息子は旅に出る前にぼくにこう言った、「可愛い父さん、幸せにな。レアは女の屑だよ、だから遠からずパトリスが、彼女の顔の上で、彼女の屋敷のテラスをぶち壊すだろう」って。ぼくはそんなたわごとには全然答えなかった。レアはその話はしてはいけないって言ったけど、ぼくらちびっ子を高く買ってくれているんだ。そうだな、ちびども。

子供たち　（揃って）はい、閣下、大佐殿の父上ばんざーい。

パトリス　閣下！　それではそちらの息子さんは大佐で？

子供三　力の限り繰返すことになるが、息子はアルジェリア歩兵（＊フランス統治下での）大佐なんだ。

パトリス　さあ、坊や、きみの部隊を整列させて、ぼくはそっとしといてくれよ。

子供三　命令だ！　気を付けーっ！

二人の子供が横並びになる。大佐の父親はポケットから短銃を抽き出し、銃口を突きつけて、二人を殺す。

子供三　さあ、パトリスどの、このことを貴殿の獲物一覧表に記入するが良い。

パトリス　ああ、坊や、坊や！　うちの子孫はどんな花を咲かせてくれることやら！　勲章をやって、親子にふさわしいキスをしてあげるからこっちにおいで。

子供三　パパ、どうしたの。ぼくはたまたまアルジェリア歩兵の大佐になっちゃったけれど、いつまでも愛の申し子だよ。

雷鳴

パトリス　太鼓打ち、はじめ。

レア　神様、あなたはわたくしに牝牛の乳房をお授け下さいました。今日という日は、叛逆の総がついた兜をお与え下さいませ。と申しますのはパトリスとわが子が、わたくしを放ったらかしにしたからでございます。

雷鳴

子供三　お起ちなされ奥方。そなたのパトリスは、旅の間に何一つ失なわなかった。ナイルの流れは数々の地方を縫って、この私は不惑にならないうちに家庭の幸せを築いたのです。私の子供を受け入れて、あなたの息子に感謝しなさい。もしパトリスがアルジェリア歩兵の大佐に出会ったとしたら、レアさん、あなたの手には宦官が戻されたでしょう。そして今日、私の父は天才の予兆のあの銃剣の声を持っているでしょう。

レア　ありがとう、坊や。坊やはご本みたいにお話をしているわ。
子供三　ママ、本は話をしないよ
パトリス　坊主、本は何をするんだ？
子供三　読むのさ。

雷鳴

パトリス　消え失せろ、蠅ども、ちびっ子爺の洟垂れ小僧めが。こいつら餓鬼どもは頭に来ちゃうぞ。腹が立つったらありはしない。
レア　そうよ。こいつらは始末しちゃうべきだわ。私だってもううんざり。
パトリス　かわいい帽子、赤ん坊たちのこの冠、その中の一人が早くもアルジェリア歩兵の大佐を息子に持っているというちびっ子たちの帽子。だがこの物語全体の中でぼくはどうなって行くんだ？　そして、きみ、今度帰って来たことに就いては？
レア　パトリス、あなた肥ったわよ。
パトリス　で、帰って来た事に就ては？
レア　ああ、散々待ったわよ！
パトリス　帰りを？
レア　どれほどじりじりしたことか！
パトリス　だろうな？　最後に聞くが……

レア　最後に何よ？
パトリス　二人で愛し合うためにさ。
レア　私は腹ぺこなの。
パトリス　きみときたら本当に大喰いなんだから。
レア　それはね、あなたをもっとよく寝ませて上げるためなの。
パトリス　それでは寝るとしよう。
レア　駄目、話を一つ聞かせてもらいたいの。
パトリス　ようし、話を一つきかせよう。これが最後だよ。十一月の末に工場の煙突の獲入れがある。手はじめに煙突は清掃のため砂の中を転がされる。この作業のお蔭で、煙突はつるつるぴかぴかになって出て来る。再利用向けの一部は右側に、残りは左側に並べられる。この左側のものは二つに分けられ、二分の一相当分が兵器製造の材料になる。煙突で大砲が造られるんだ。あとの二分の一は競にかけられる、つまり散々になってしまうのさ。とはいってもね、人手から人手へと渡るうちに、磨り減って、工場用だった煙突は間もなく、もう跡形もなくなって終う。残るのは工場と大砲だけ。そこで工場が大砲の標的にされる。大砲は希望する女性たちに一人一門づつ引渡され、ついに一門も残らなくなる。
レア　その女たちは、私のパトリス、大砲を全部使って何を作ったの。
パトリス　ねえ、きみ。ぼくを信じるのはきみ次第だが、彼女たちは大砲を食ってしまったんだ。
レア　まさか。

作者登場

作者　ああ、ここだ！　パトリス！
レア　誰方ですの？
パトリス　作者だよ。
作者　私に用かね？
パトリス　いいえ。
作者　（パトリスに短銃を差し出して）さあ、これを取りたまえ。これが要るんだから。
パトリス　ごもっともで。

作者に向けて発射する

作者　無駄だよ、パトリス君！　その弾丸はね、ぼくを傷つけられないんだ。お気の毒さま。
パトリス　それじゃこれをお持ちになって下さい。ぼくには使いみちがありません。
作者　お願いだ。ぼくのために使いたくなければ、きみが演じているドラマのために使ってくれたまえ。ドラマの大喜利には最後の一発が欠かせないことを保證するよ。
パトリス　そういうものですか？
作者　間違いなしだ。
パトリス　それなら仰せの通りにします。ご機嫌よう。
作者　あばよ、パトリス。
レア　もし、もし、作者さん。

作者　何です？
レア　私には何も下さらないの？
作者　本当だ。これを取って置きなさい。

彼女に二挺目の短銃を差し出す。

レア　少なくとも弾丸はこめてあるわね？（パトリスに）あなたは充填装置をきっと調べなかったに違いないと思うわ。
パトリス　心配するには及ばない。二挺ともちゃんと弾丸をこめてあるさ。
レア　（パトリスに）この方はどこかドヴィックに似ていると思わない？
パトリス　うるさいな。こちらはちゃんとした人物だ。
作者　パトリス、大目に見てあげなさい。
パトリス　何を仰言るんですか？
作者　レアは女性だと言っているのさ。
パトリス　ぼくだって女性です。これには何とお答えを？
作者　ぼくの答はこうだ。そのことならぼくの方がきみよりも良く知っている。だが、その点できみが巧くやっているとは思わない。
パトリス　ぼくの肌がどんなに白いかごらんなさい。
作者　それは大した證明にはならない

パトリス　たしかに、もし万年雪がなかったら、何の證明にもならないでしょう。万年雪はね、作者さん、見透すことをぼくに教えてくれたんです。そのことを覚えておいて下さい。山は、実のところ、ぼくには厄介者でした。しかし、山からぼくが何を作ったかご存知ですか？

作者　山から何を作ったのかね？

パトリス　人間を作ったのです

作者　ねえ、きみ。きみの言葉は万事不可能にしてしまうよ。

パトリス　それじゃ無言劇をお作りなさい。

作者　だがね、ときにぼくが他のやり方で行きたいと思ったことがあったかね？

パトリス　ありましたとも。愛の言葉をぼくの口に入れてくれましたよ。

作者　そんなものは吐き出すべきだったのだ。

パトリス　やって見たんですが言葉が銃撃や目眩に化けちゃったんです。

作者　私には何の責任も無い。人生とはそういう風にできているのさ。

パトリス　それでは人生の方はそっとしておいておつむに胎ませるんですね。

作者　必ずやって見せるさ。

パトリス　そのおつむのお産のときには、脳味噌をぼくに少々取って置いて下さい。

作者　ぼくに委せたまえ。

パトリス　喜んで脳味噌抜きでやって行きます。それでも、それはレアの子供を面白がらせるでしょうよ。

作者　他に注文はないね。

パトリス　ありません。

レア　私も何かお願いできるかしら？

作者　注文が多過ぎなければ。

レア　それでは私に小さな脳を二つ下さいな。一つは子供のため、もう一つは私のために。

作者　あなたのために？

レア　ええ、そうよ。それで私の脳は三つになるわ。

作者　どういうことだ？

レア　私のとパトリスのとあなたの脳。

作者　大急ぎで　私に委せるんだ、委せるんだよ。（小声で、パトリスに）きみ、良い忠告を一つ。あの品物を使うんだよ。きみの未来がかかっているぞ。

逃げ去る

パトリス　どこに走って行くんです？　どこに？

作者　子供が産れそうなんだ。お寝み。

長い沈黙。パトリスとレアが見つめ合う。

パトリス　ああ、レア。それでもこの世には愛がある。

レア　綱一本にまで磨り減った愛が、そして首吊り用の一本の綱が。愛って、目に見えない磨滅の作用よ。ここ

にはあなた、パトリスがいるわ。

パトリス　ぼくがだって。ぼくの話をしよう。ぼくは糸の上に乗っかっているちっぽけな骨髄の栓なのだ。居るのは、レア、きみだよ。

レア　ああ！　パトリス、怒りのすばらしい構築物。私はとっぷりとバラに養われているの、花の香りがするわ。私には炭素と下着が必要なの。痛みというものがあるのよ、パトリス。

パトリス　痛みだって？　痛みとは肉体を生む熱い油の一滴なのさ。言葉が思考の痛みであるように、頸の峡部が肉体の痛みであるように、地球の曲線は世界の痛みなんだ。そして肉体をぱっさりやることで、生命の一番悲痛な罪人どもが分離される。痛みとは？　偉大な生成なんだ。でも優しさというものがあるよ、レア。

レア　優しさですって？　駄目よ、パトリス。優しさというのは発条の端に付けられた贈物、死に向うだらけた病気なの。ぶよぶよの頬っぺたに、捩じ曲げられた膝。そんな姿でキスしないでね。優しさなんて学者犬の製作所よ。でもね、パトリス、赦しがあるわ。

パトリス　太陽のような赦し、回帰のような赦し、ブーメランまがいの赦し、誕生みたいな赦し、四季のようにめぐる赦し、微塵も遺恨がない赦し。

レア　死があるわよ。

パトリス　そうだ、死がある。でも赦しみたいな死、山に積る雪のような死。ナイフで切られる火のような赦し。建物の用材にされる水みたいな赦し。それを使って別の犯罪が生み出される殺し屋同然の赦し。それを使って別の死者が作られる生存者たちに似た赦し、それで嵐を起す秘訣にそっくりの赦し、金もうけの種子にされる馬に似た赦し。雲を造る材料にされる爺さんのような赦し。ぼくみたいに、ぼくがそれで犯人を作る材料にする赦し。きみのように、ぼくが毒舌のねたにする赦し。心臓がもう赤くなっている。流れ出すんだ、レア。両

手を影どもの銅板に乗せて。そこでは誰かが今にも死のうとしている小屋の奥まで、心臓がもう赤くなっているんだ。

レア　パトリス、止めて！

一発発射する。

パトリス　どうした、レア？　どうしたんだよ？　きみは、たったいま、客を一人殺しちゃったんだぞ。

第五場、第三幕おわり

編者注

（1）　フランス語の綴りはGillotinであり、断頭台の考案者ギロチン博士の名前と同じ。フランス語の発音だと「ギヨタン」になる。台詞の中に、名前の音を細切れにしたような部分も出でてくるので、訳者は音感を重んじて「ギヨタン」としたと思われる。

（2）　原文は、Ma mère vous *enchien* ce panier de *voie*. という意味不明の文であるが、イタリック体になった部分のうち *chien* と *voie* を置き換えると、Ma mère vous envoie ce panier de chien. というまともな文（「母がこの犬の篭をあなたにお送りします」）になる。一種の言葉遊びであろう。訳文も、そのまま読むと意味不明だが、ヴィトラックの原文と同様に、傍点をつけた部分を置き換えてみると、「母がこの犬篭をあなたにお（お）くりし

ますって」となり、意味が通じる文になる。日本語にするのが非常に困難な言葉遊びであるため、とりあえず同じ操作をしてみた、という訳者の苦肉の策であろうか。

（3） 原文は、Les vessies et les lanternes, mon amour ? である。vessie（膀胱）と lanterne（提燈）については、prendre des vessies pour des lanternes（豚の膀胱を提燈と間違える→とんでもない勘違いをする、馬鹿げたことを信じる）という慣用句が存在する。豚の膀胱に空気を入れてふくらませてから乾燥させ、提燈のように吊るして、豚肉屋の看板代わりにしたという習慣に由来する表現のようである。